

マーヴィン・W・バーコピッツ著、
中山理監訳

『学校が変わるスーパーテクニク
アメリカの人格教育からのアプローチ』

木下 城康

洞察とユーモアに満ちた教育者向けのエッセイ集を紹介します。全二十章は緩いつながりを保ちながら独立した内容になっています。どこからでも読み始めることができますが、読者は迷子になる前に冒頭の「監訳者まえがき」にお目通しください。迷子というと奇妙ですが、それには筆者の教育理念と深い関わりがあります。筆者は、(1)伝える (inform)、(2)その気にさせる (inspire)、(3)当惑させる (disconcert) という手法で、本書を執筆しています。特に、「当惑させる」とは何ともユニークです。意図的に、読者に葛藤を生じる設問を投げかけて、それが内省と自己成長につな

がるというのです。監訳者の中山理は「実際に読み応えのある」エッセイと評していますが、この評は的を得たもので、読者は所々で立ち止まり、迷います。

本書には、至るところに内省モードに入るスイッチが散りばめられています。筆者はユーモアあふれるコラムリストでもあり劇作家でもあるので、本書はエンターテイメント性にあふれたエピソードが記載されているのです。たとえば、「教育には即興性が必要だ」という章には、子供達は予想もできない発言や行動をするので、親や教師の即興性・即時性が試されるとあります。そんな例を次のように紹介しています。

内科医に連れてこられた小学生の男子とその母親の話です。病院の待合室での出来事です。突然、母親が男の子を平手打ちしたのです。驚いて止めに入った医師にむかって「この子は大馬鹿なんです」と強い口調で答えました。子供に対する語り口が心配になったその医師は、詳しいわけを聞くことにしました。すると、「この子はネズミを食べたのです」

といいます。どういふことかと尋ねると、母は何も言わずにハンドバッグをあけて、ネズミ取りに引っかけたままの「頭のとれたネズミ」を取り出しました。

この少年は、ネズミ取りにかかったネズミの死骸をみつめて、頭を噛み切り飲み込んでいたのです。すぐに撮影された腹部のレントゲン写真には、ネズミの頭蓋骨がはっきりと映し出されていました。6歳の子供に何を取り憑いて、死んだネズミの頭を食いちぎらせたのか、まったく見当もつきません。このように多くの子供が行う「ひどい」行為に多くの大人は驚かされます。

こうした予測不可能で、事前に対応の準備がされていない事態には、臨機応変な対応が求められます。教育者は即興的な行為でなければならぬのです。予期できないことが起きたとき、子供にとって教室は「教わる」場から「学ぶ」場に変化します。そのときの教師の対応は、本書によると次のようになります。
・要点を口頭で説明する。

・教室を話し合いモードに切り替える。
 ・効果的な集団反省会を開催する。または、他の適切な学びの方策を採用する。
 ・子測できない状況に追い込まれても、新しい現実をすばやく把握して次の行動を即興で行わなければならないのです。

このスキルはトレーニングで磨くことができます。積極的にスキルを改善していくことが、学校全体を改善する良い方法だといえます。

次に紹介するエピソードでは、「あなたのクラスには、このような生徒がいますか？」と問いかけます。

先生…教科書を開けてください。昨日はどこまで学んだか見える人はいますか？

生徒…(挙げた手を一生懸命に振っている)

先生…はい、クリス。

クリス…お兄ちゃんがネズミをペットにしているよ！

教育者ならばこのような生徒を受け持つ

たことがあるでしょう。このエピソードは、教科書に書いてあることよりも、興味をそえられる何かが頭から離れない生徒についての話です。

クリスにとって、兄の部屋にいるネズミは好奇心をそえられるもので、忘れることのできないものなのです。彼の頭のなかにあるネズミを取り除かない限りは、算数も言語技術も学べそうにありません。このネズミはクリスと教師が教えたいことの間、居座って邪魔をしているのです。

さて、本書はこれに対して教師はどのような対応をすればよいかを示してくれます。

(1)子供たちの頭の中にネズミが入るのはいつなのかを知る。

(2)子供たちの頭からこれらのネズミを駆除する効果的な方法を持つ。

この二つは、教師が身につけるべき重要な技術であるにもかかわらず、教師養成のプログラムで教えられることはなかったと著者は指摘します。ですから、そのような有効な対応方法を教育者のいわば教育学の兵器庫に装備しておく必要があります。さもないと、このようにネズミによって教育

者の努力が無駄になり、生徒を欲求不満にするだけなのです。

では、何ができるでしょうか。筆者は、次のように示唆します。

(1)子供たちには生活があり、それを学校に持ち込むことを認める。

生徒には生活があることを理解しなければなりません。校門をくぐっても、教室に入っても、生徒たちは自分の生活をやめることなく続けています。一方、学校側は悲しいことに「子供たちは学ぶ準備ができていない」と思い込んでいます。子供たちは自分たちの生活を学校に持ち込んでいるのが現実なのです。

(2)子供たちの脳の中にネズミがいても、子供たちの責任でない場合には非難しない。

生徒たちが、集中して欲しいこと以外のことを考えているのではないかと思ったり、教師のすることは、その考えを受け入れて、学校に持ち込んでいることを責めないことです。いくら大目に見てあげなくてはなりません。

筆者は、クラス・ミーティングが有効な

方法だと提案します。やり方次第で、大脳皮質からネズミを駆除することができるといのです。どのようにクラス・ミーティングを進めるのでしょうか。

「チェックイン・ミーティング」では、生徒たちに自分の生活を紹介する機会が与えられます。円座を組んで順番に自分自身について語って共有します。教師が時間の長さをコントロールしたければ、「私が話したい一つのこと」と始めるようにすればよいでしょう。

小学四年生担任のある教師は、円座に組ませたあとで「身体的」または「感情的」にどのような状態かを五段階で言うように仕向けました。すると「私は両方とも5」とか「僕は体は4だけど、感情は3」と次々にコメントが出ました。

あるとき、アランが「体は5だけど、感情は1なんだ」と言いました。生徒たちは心配してどうして「1」なのかと尋ねると、叔母の犬が死んでしまったということです。生徒たちがアランの気持ちに寄り添おうとした途端にこのチェックイン・ミーティングは問題解決ミーティングに変貌し

ました。

ある男子生徒が「その犬について僕たちに話してみてもどうかな。僕たちの一人がその犬のふりをして、一日中君の後をついてまわることもできるよ。そうすれば気分もよくなるんじゃないかな」と。とても魅力的な提案でした。こうしてアランの頭のなかにいる犬を、生徒たちが取り除く仕事を買って出たのです。

子どもの頭の中にネズミがいたのでは、教えることはできないので、この教師は実に巧みにそのネズミを取り除きました。本書には、このような具体的な方法が詰まっています。実用的で現場の問題を解決するための方策が著者の経験と学識によって提案されています。

終わりに、あとがきの一節から引用しましょう。

「最後の言葉を述べて締めくくりたいと思います。それは勇気です。本書からどのような知恵を摘み集めても、それと向き合っている、受け入れ、展開していくには、多大の時間と労力を要するのです。本書で名前を挙げ、私が役割モデルとして取り上げた教

育者たちは、勇気と知性と純粋な心情の持ち主であり、私たちの誰もが行う必要があることを行っているのです。彼らは、子供のことに気を配り、学校の支配力を理解し、不転の決意で優れた教育とは何かを追求し、生徒の望ましい成長と社会の市民のタマゴの養成を促すような立派な学校をつくるためにそれぞれが独自の道をもっているのです。」

このあとがきから分かるように、本書はアメリカ人格教育の実際の取り組みを非常に具体的に紹介したものです。理論だけの本が目立ちますが、本書のように教育とは何かを改めて考えてみませんか。

*マーヴィン・W・バーコピッツ博士…ミズーリ大学セントルイス校人格教育学教授、同大学人格・市民性センター共同センター長。一九五〇年、ニューヨーク州クイーンズ生まれ。専門は人格教育および発達論。博士（生涯発達心理学）。著書に、*Parenting for Good* (2005)。現在、*Journal for Research in Character Education* 共同編集者。二〇一一年度ミズーリ大学トマス・ジェファソン教授賞などを受賞。

〔麗澤大学出版会、平成二十六年〕

